

平成 31 年・令和 2 年度

札幌大谷第二幼稚園・認定こども園大谷オアシス保育園 学校評価

## 1, 始めに

今年度は世界中がコロナ禍に見舞われ、我が国においても生活を取り巻くあらゆる環境が大きな制限を受けざるを得なかった。幼稚園、認定こども園を含めた教育においても対面や密に対して多くの警鐘が発せられ、特に、密なる環境においてなされる幼児教育は戸惑いの中で試行錯誤を重ねる日々を過ごさざるを得なかった。

そのような中での教育活動について、実践報告、親へのアンケート調査、教師による自己評価、及び両園長等へのヒアリングに基づき、評価委員会による評価を行った。

なお、本評価に当たっては過去に保健管理、安全管理、組織運営、研修等々の網羅的な評価作業を行っていた経緯もあったが、それぞれの適格性を踏まえ、最も重視すべき特色ある教育活動とその内容に焦点化した評価を実施したい旨を評価委員会から園側に申し出たことを付記する。

## 2, 評価

### (1) 重点目標「楽しく食べる体験を深め、すべてのいのちを大切にする」

仏教園である両園は「いのち」「こころ」の教育を大切にしながら歴史を重ねている。そして食においては「いのちをいただく」ことを通して、「生かされていること」「感謝をすること」そして「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶の大切さを子ども達に伝えている。

今年度の重点目標達成に向けて、「環境」領域の、特に「食育」の意義を追求し、深め、規則的な食事や食事時間のコミュニケーション、愉しさ、さらにはマナーなど、子ども達の育ちに期待する内容の吟味も重ねられた。

幼児教育が「環境を通して」「遊びを通して」総合的に行われることを踏まえて今年度の実践が重ねられた。

### (2) 評価項目と評価

#### 評価項目と自己評価（別紙もしくは下記）に対する評価委員会による評価

##### I 当園の「食育」の理解、取り組みについて

『食』を通じて、健康・安全などの食生活に必要な習慣や態度を身につけさせることができているかについてはほぼ全員の教職員が「できている」と答えている。また親に対するアンケートの「子どもたちは園での食事時間を楽しみにしているか」の問いに対して 90%の親が「楽しみにしている」と答えている。ヒアリングを通して園での食事時間の食育教育が各調査項目の結果において、子ども達にとって楽しい時間になっていること、そしてその意義も十分に達成されていることが理解できた。

食事時間を介してのマナー、社会性の教育については家庭環境の違いなどにも教職員間で気づき合い、情報を共有しながら行っているなど、園としての自己評価は「A」となっている。

委員による評価にあたっての議論・意見において、これまで両園の「食」に係わる教育が高度に継続的に実践されていること、生き物の命をいただいていることへの感謝の「ののさまいただきます」の実践が日々行われていること、園庭での野菜作りと美味しくいただく新鮮野菜による好き嫌いをなくする教育活動のこと、七草などの野草を調理して食する活動のことなど、五感を通した豊かな「体験重視」の教育活動が大きな特色であることが次々に出され、委員の元父母の会会長、現PTA会長からも高い評価が為された。

これらの議論と、園による自己評価を総合的に判断して委員会による評価は「A」とする

## II 「食育」への興味・関心について

「年間を通した食育活動」「身近な食材を使っての食育活動」「食育活動についての保護者への発信」、これらの達成度について教職員間の評価は「できていた」とするものが70%である。コロナ禍において、特に「食」と関連する活動には制限が加えられ、前年できていたことができなくなったこともあった。しかし、畑で採れる様々な野菜の味付けや調理法を考え、子ども達が美味しく楽しく食べることができるよう、それぞれの教職員が工夫と努力を重ねていた。また、園庭のなかよし畑とそこで栽培する野菜について、親にも関心を持ってもらい、家庭で子どもと話題にしてもらうことを狙いに、登降園時に親子でミニトマトを採って食べてもらうなど親への発信にも工夫を加えた。

しかし、これら日々の取組みをホームページから発信することについては疎かになりがちで、園による自己評価では大きな反省材料となった。

これらを踏まえた、園としての自己評価は「B」である。

委員による評価にあたっての議論・意見においては、コロナ禍における幼児教育の困難性や、ひとり一人の子どもにとって二度と返らぬ当該年代における経験の重要性であった。特に、季節の野菜を食べるといった「食育」活動はコロナ禍にあつての衛生面の視点から、難しいことが多かったであろうことが話題となり、with コロナ、after コロナの次年度以降に、これらの取組みへのさらなる工夫の必要性が話し合われた。しかし、コロナ禍にあつても「重点目標」に向き合った教職員のチームワークと実践、そしてヒアリングにおいて確かめた成果は委員会に置いて高く評価できるものであった。

一方で委員の一人は、かつて我が子が在園した幼稚園の日々の教育活動の現状を楽しみにしてホームページをチェックしているが、その更新頻度が少なく、これは在園児の親にとっても物足りないのではないかと語っている。認定こども園は、これまで園で掲示していた活動日誌・活動日記を保護者専用ページで閲覧できるようにする等の工夫をしてはいるが、広くその教育活動を伝えるという部分においては十分とは言えない。

自己評価にも特に示されていたように、ホームページの定期的な更新による情報発信は委員からも改善を期待する課題である。

これらの議論と、園による自己評価を総合的に判断して委員会による評価は「A」とする。

### 3, おわりに

幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領は子ども達に対して「環境を通して」「遊びを通して」総合的にその育ちを引き出す教育活動を期待している。

両園は、開園以来、仏教保育に立って、自然との五感を通じた関わりと直接体験、感性の育みを重視している。自然の太陽も雲も虹も、雨も風も雪も、木々や草花や土や石も子ども達の五感に訴える教材として位置づける大谷第二幼稚園の教育活動は市内ばかりでなく、道内の多くの幼稚園・認定こども園に影響を与え続けている。そして今日の幼稚園教育要領に示される幼児教育の本質を外すことなく貫いてきていることは伝統を踏まえて伝え続ける教職員の絶え間ない研修と努力の証と言える。

今年度の評価にあたって、委員からは今年度の「食育」との関連において、いくつか高い評価に結びつく意見や話題が示された。「我が子が在園中、よもぎを摘み、餅をつき、よもぎ餅を美味しそうに食べていた。おやじの会で餅つきの会も開いた。味覚の「甘い・酸っぱい・塩辛い・苦い」を経験しながら、楽しい食育体験を通して、ほろ苦いよもぎを幼少期に体験できることは、とてもよいことで有難いことだと思う」「先生方の豊かな知識と経験から、野にある草は全部喰う、の精神で野性味ある食の体験ができた卒園児たちは、体験を通して豊かに感性が育まれた」「採れたてのトウモロコシ、トマト、カブ・・・それらの匂いと味は生涯忘れられない」「これらの教育活動を貫く大谷第二幼稚園はこれからもその教育を持続し、豊かに子ども達を育てたい」「コロナ禍にあっても、園の方針に基づく教育活動にあきらめずに向き合う先生方の姿には頭が下がる」「SDGs への共感と対応が生活の中に求められるようになってきて、食べ残しや無駄が課題となり、消費者としての在り方が問われる時代になってきている中、園の食育教育が持つ意味は益々大きい」「ののさまいただきます、ごちそうさま、命や自然への感謝の気持ちが育まれる教育を高く評価している」等が示された。

以上、今年度の評価委員会ではコロナ禍の一年間を踏まえて、評価の観点が「コロナ禍の教育」に流されるきらいはあったが、評価委員会として総合評価を「A」とする。

なお、本評価の取組みとその公開は教職員、保護者、地域住民が園の取組みや現状について理解を深め、教育内容の質的改善に資するだけでなく、保護者、地域住民の園運営への理解や参画に結び付け、地域に愛され、支えられる開かれた園づくりに結びつくものである。

追記)

歯科医でもある委員の一人から「食べ方も食育の視点に、として、早食いにならないよう、ひと口をいつもより少なめに、みそ汁などの水分をとらずに自分の唾液だけで25回から30回咀嚼してから呑み込む習慣をつける、それによって口腔生理機能が間違いなく向上し唾液の性能が上がり、子ども達の将来の虫歯予防、歯周病予防、肥満防止、味覚向上、臭覚向上、健康の質の向上に結びつきます」との助言があったことを付記いたします。

令和3年 4月 28日

評価委員長	平野	良明
評価委員	廣田	和久
評価委員	谷口	昭博
評価委委	中村	圭宏